

小學修身初步

藤澤南岳編

卷三

館新書會育影本日大		
四册	二五號	一八函

18
4
19

不認定等

K120.1
6
3

K120.1

6

3

藤澤南岳編 尋常科用

小學修身初步

東崖堂刊行

明治二十二年二月二十一日 藤澤南岳會 3365

小學修身初步卷之三

藤澤南岳編

第一章

勸學

○學者ハまづ孝悌忠信を先とし。常
小善を好む。人を愛する故以て。志と
し。日日小進とめて。善を行ふをよし。

小學修身初步 卷之三 藤澤南岳編

大和俗訓二卷

十九丁才

○學問する人を。先志を立て。志を
 立るとい。君子とならん事。成はね。心
 心づけて。あをれざるを云。た。一つを
 都ふゆく人。一步をふみ出をよ。念
 念都よ上る事を。日すまざるが如く
 なるべし。君子とを。徳の至まる人を

云。君子とふる道を。善を好む。誠あ
 ぶを以て本とす。初學訓三卷
十九丁ウ

○朝たい師にまふび。晝の朝まふび
 たる事を。けとめならひ。夕をいふま
 をいよくかさね。夜の一日の間。乃あ
 やま。里をか。んづつて。あやまちふけ
 きば。夜をや。をくいぬべし。とし過あ

らば。悔はぢて。來日のいましめとを

るし。大和俗訓二卷
四丁ウ

○數十卷の書成。讀こと有れむ。便ち
自ら高大よし。長者を陵忽し。同列を
輕慢す。人こまきを疾く惡むこと。讎敵
の如く。鴟梟の如し。學を以て益を求
め。今却て自ら損む。學ぶこと無きふ

如ず。顏氏家訓

○嘉肴ありと雖も。食はざまを。其旨
きを知らむ。至道ありと雖も。學ばざ
れむ。其善きを知らざるなり。禮記學記
第十八

○學問の道ハ。極て廣大高妙ふして。
深奥なり。志のまじも其近き所。孝悌
忠信の。日用常行より。故ふいのな

る愚ふる者も。此道ハまなびやをく。
 一々やすく行ひやをし。高遠よして。
 あやしく異ふる道ふあらず。大和俗訓一卷
 十二丁ウ
 ○古の聖人をら。猶師よ志たごひて。
 學び給ふ。況今時の九人。學ばむして。
 道を志りがたし。小藝だよえ。師なく
 習ひふくしてい。なうがたし。況人乃

道を。即天地の道よて。極めて大なる
 をや。學びてもまふびやうあしけま
 を。道をしらぞ。學ばむして。道を得ん
 事ハ。萬々此理なり。大和俗訓一卷
 十三丁オ

○學者讀書の樂こ。まのまをふし。此
 樂こ無學の人ふ。しらあめがたし。わ
 づ輩の如き。愚者といへど。と書成よ

山學傳事抄 卷三 四

めば古の聖賢よまの阿たりまみえ
て其教をきくが如し。又書をよめば
天地萬物の道理に通じ。からやまご
の。天下古今の事を知る。其樂ミ大ふ
らずや。初學訓三卷
十丁オ

○志を立つる事ハ。大ふして高くす
べ。小にしてひくげまば。小成小安

んどて。成就一がたし。天下第一等の
人ごならんと。平生よ志をべし。中略か
く志をたて。日日月月よ。ほごめ行
はむ。久しくして。其功つも。必人よ
まさるべし。上成まふべを。中よいた
る。中を學べを。下よいたる。下を學べ
ば。功となさべ。大和俗訓一卷
十八丁ウ

○萬の事は、ドめふ苦勞せむして、おこたまむ。後ふ功ならずして、樂みなしたとつむ。あつき灸をこらへ、苦き藥をのめば、後ふ無病の人となるが如し。學問よおいて、尤此志るし有る。わうき時辛勞する人の、老て後樂こ多し。

大和俗訓一卷
廿九丁才

藤原敦親の、ゆるき博士ふりしが、人のものをいふ事あまむ。あらむくこのいともをり。少納言入道信西人よあひて、いみどき事ふりて。ほめらまければ、その人ころ事を問ふん。いらびといもむを、何のいみどき事あらんといひけむ。入道身よ才智あるものい。あらずといふこや、成耻ざるふる。實才なきものい。萬の事を、いふがやにをるこそ。あらざるを以て、耻とするなきを、べて學問をしてい。萬の事

哉とふ知るあまきらむる事と思ふ。尤僻事よ
 てあるなり。大小の事よまふるまでをるこ
 そ。學問のきはめやいふなれ。そまを知らぬ
 まば。難儀を問れてしらすといふ事を。耻とせ
 ぬなりと。找いをもとけふ。日新館童子訓

熊澤蕃山。名の伯繼。字をいた介といふ。平安の
 人なり。深く中江藤樹の學徳を慕ひ。往てこま
 小謁し。業を門よ受けんことと請ふ。藤樹辭を
 るよ。人の師となるに足らざる哉以てま。蕃山

益請ふて置のを。二夜其廡下に寝ぬ。藤樹の母
 こまを見て。藤樹よ謂ていそく。人遠方よ來
 る。懇請するよ。こ此
 の如し。これよ習ふ
 所を傳ふ。誰の好て
 人と師とふると謂
 せん。是よ於て始
 て接客を。蕃山時小
 年二十三ふるとき。先哲叢談



小學傳書抄 卷三

七 東洋傳書抄

第二章

篤交

○朋友の間。禮あつけば。あらそひ
 ふし。喧嘩口論ハ。必無禮よりおこる。
 人ふ交る。禮義正しく。慇懃ふまを。
 人と我との間。滞ふくして。和らぎむ
 つまじ。中略晏子あんにの人。にまどてるふ。久

しくして敬ひし事を。聖人もやめ給
 つり。久しく交りて。たがひふ心やを
 くなつるゆくまふ。無禮をなすべ
 らず。大和俗訓八卷
 五丁ウ

○人ひとふ無禮なるとて。咎むづ
 らず。おろかふる人か。或を酒よゑひ
 たふ人の。狂人とたふじけまば。堪忍

したるにていさか耻辱よのあら
ず。かまふ對していかりあらそふを。
我も又おろかなるまこと云べし。敵對を
危からば。大和俗訓八卷
七丁オウ
○友とする人を。尤えらぶべし。智阿
里て。目がある。まきをたべし。まきを
すむる。忠直ふる。たのえ。まき入あら

ば。また。みて友とをべし。直ふるべ
やいらかふして。あが心にかなつふ
人を益なり。初學訓四卷
十七丁ウ
○朋友乃交る。猶以て人を先ふし。
我を後ふすること。委曲丁寧ふるべ
し。人を先よをる。仁なり。我を後よ
する。禮讓ふる。かくのぶとく。先後

をふときい。身修まる哉待たどして。
人和してたのしかるべし。
民家童蒙解
上卷十六丁ウ

○朋友の交りの第一信義を宗とし
て一言をも變せば一約と違へど。
我非を責るふ急よして人乃非を咎
めず。無禮誹謗を堪忍し。堪忍し得る
の跡此心を仁と禮よて拭ひたて。怒

をうつさど。怨を留めず。以て和順を

ぞし。
同上下卷
十六丁オ

○朋友を信をあつくし。たごひよ善
をすくめ。惡をいましむ。是朋友の道
なり。もし過惡を見ふがら。いさめざ
るハ。信なきふり。朋友の道よ阿らび。
朋友いたのもしくありて。難あれを

相助け。患あまば相救ふべし。初學訓二卷
八丁ウ

○九都鄙を論ぜむ。たふじ郷村に住居する人を。先祖以來。常ふ行きかよひ。互又久しく馴習ぬまを。其筋目尤忘るべのらび。たとへむ他國にありて。我故郷の人にあそむ。よくなつる志く。親族の思ひを。なまをきぐがと。

六諭衍義大意十六丁オ

○さてあひ交るの道をいそむ。常に慶吊をのべやみ。且づらひを問ひ。定むたる事と云ひながら。尤禮義を盡し。眞實の志を致をべし。水火盜賊不慮の難あらば。互ふ合カして隨分救ひ援くべし。六諭衍義大意
十九丁ウ

○家の主は。所ねふ仁愛として。善を

行ふを以て樂としほとむべし。餘
 賤あらば。兄弟親戚の貧窮をにぎは
 一。朋友の乏きを助け。略中饑寒をすく
 ひ。わが家よ久しく來れる。貧困なる
 者にやどこし。窮民のよる所なき者
 あらば。わがちからよ隨て。そくふを
 一。

家道訓一卷
 十二丁ウ

○善あし人をあけつらひて。教へ導
 き。賑し濟ふなど何ぞして。然らば一郷
 の人おもひ合て。一家の親とふ同の
 らん。いかで和睦せざる事やあるべ
 き。

六諭衍義大意
 二十丁オ

右大臣藤原良相。此大臣きいめて。親族よあつ
 くおひまして。同姓の人乃事たらぬを見て

は。そのほごりくよふとがひて。かならびめぐみ
 給ひける。後よを一院をたて。藤原氏のおち
 ぬきて。世をおたすかぬふ人を。皆その内に
 てやしふれける。其院を名づけて。延命院とい
 ふ。又別ふ一院をたて。藤原氏の婦女のよる
 べあきとそぐくみ給ふ。其院を崇親院と名づ
 く。所領のこれ二院といひゆるところ。尤おかの
 りけるとぞ。大和為善録

寛保壬戌の歳。關東大水よよる。武州入間郡。最

その害を受け。民舍湮没をること數十里よ互
 る。奥貫友山。食を舟よ載せ。僮僕と漿して以て
 行き。餓ゑたるものに飲食せしめ。其濕處ふ
 て。病むものを視まば。悉くこまを載せ還りて。
 己の家よ養撫をること數百人。因て其父よ請
 ふて曰く。大人平生兒よ儉を力め。用を節をる
 ことを誨たまへり。豈今日の急あるが爲る。願
 くは家世の積聚を傾け。以てこまに當らんと。
 父喜びておと成許を。是よ於て大よ倉廩と發

きて。飢民ふ施予を。流氓男女傳へ聞きて。争ひ
 いたる。門前市のごとし。友山多く粥を作ら。奴
 の。最^モ恭謹なるもの
 數人を擇び以て。六
 まで待たしむ。戒て
 以てく。飢餓をるえ
 の。固よる貧しきよ
 あらば。慎で輕慢を
 ること勿れと。至と



バ吊唁を厚ふと。飢民其辱きを拜と。友山一不賓
 客ふ接するが如し。壯幼を問はず。人ことに米
 四升を與へて行かむ。受るもの感謝せざる
 をし。既よして廩盡ぬ。又人をして金を四方よ
 齎し。穀粟及ひ大豆蕎麥を買はしむ。金盡ぬ。復
 父よ請ひ。田宅を江戸の富商よ質とし。金を得
 て以てこよ繼ぐ。冬十月よ。翌年四月に至
 りて止む。惠與の及ぶ所四十八村。終始救ふ所。
 十萬六千餘人。後明和。中。武藏相摸。上野の三州

荒饑を姦民相集りて盗を爲し。富商を劫奪し。民舎を毀壞し。暴亂甚だ多く。將に友山の家に及むんことを。一人走りに至り。大に其徒を呼て曰く。是我奥貫翁の居ふる。在昔寛保の水災に翁の阿る城以て。我祖父母兄弟をして。生存をるを得せしむ。汝こそ城知るか。衆大に駭き。相與に顧て曰く。我儕力の庇恩に報むべきなくして。反て虐をべけんや。門外に俯伏して去る。故に其四隣皆これに爲し。暴亂を免る。先哲叢談

木下順菴。松永昌三に學ぶ。學成りて未仕へず。加賀侯幣を厚くして。これを城召を。順菴辭して。いとく。先師松永の子。未仕途に就か。家道屢空し。願くは彼を用ひたまへや。侯亦これを聞き。いとく。親朋密友といへども。利害の關をる所を。即相背く。順菴のごとき。い古人此節ありと。乃松永氏の子と俱し。これを禮聘に。先哲叢談

第三章

厚生

○天地の間は生るゝほどの人貴賤
 貧富を論ずる事なく人々我はあた
 りたる所作あり是日が生涯ふほき
 て定まりたる道理なほ故は生理と名
 づく此生理は落つきて外をえとめ
 ざるを各生理はやせんずるといふ
 なり。

六諭衍義大意
 二十六丁才

○農を田をほくる民なる是人をや
 しふふをこれをまば四民の本あり。略中
 耕作と専はほとめしむべし。農は天
 の時よきたるをひて春夏秋冬のほと
 めおこたるをからび又地の利ふよ
 りて其土は宜しき五穀をううれを
 田畠の業はひよし其上儉約ふして

賤を妄に用ひざれを。賤多くして。公
に貢をそふ。父母妻子をやふふ
に。ごもしからば。又身裁は。一み法
度を裁のさず。公役ふおこたらば。私
用を後にし。土貢をもやくをさむれ
を。はみとがなくして。父母のうまへ
なく。其心も亦安樂ふる。是良農なり。

初學訓四卷
三丁ウ

○工を器物を造くる。諸職人なり。各
其職を造とめ。器物をねんごろによ
く作り。麁惡ならざれを。求めのふ人
多く。利を得る事多し。是良工なり。同上
○商ハ利をかろく取て。多くむさば
らば。いつても里なく。人をあざむらざ

れむ。人は是をうたがもび。たのもーく
 あるて。其ことを誠信じ。其あま物を
 多くかふ。故ふ阿まき物ひろくうれて。
 利を得ること多く。富を得る事やを
 ー。是良賈なる。同上四卷
 四丁ウ
 ○また定りたる産業ふくして。負擔。
 日傭などして。世をりくふとれある。

いやーと諺ふも。天より食物なまら
 をび。生せざといへむ。是等の人とお
 こたる間なく。かせぎだふせむ。我よ
 當りたる衣食などかふるべき。又
 女よと生理ある。古を國王の后さつ
 手づから蠶繅りて。衣服を作るや。以
 つり。況それより以下乃人。いさこの

おこたるづのらび。凡在家の婦女を。華麗をそのまじ。遊戯を樂まず。常に機おそえ。繡まじを勤め。そやくたき。たそく寐て。辛苦伐みづからすべし。是女の生理なり。六諭衍義大意 二十七丁オウ

○古人を。人の朝早くおくと。たそくおくと。戒以て。家の興廢を知る

といへり。朝早くおくるは。家のさかゆる志るしなる。おそくたくるは。家のたどろふる。とどろふる。朝つとにおきて。事をほとむる。戒以て。身のならはしと。家のほとめ。乃則と。みならはしむ。し。凡の人をみる。ふ。朝いして。學ぶ事。ふくむ。家業をおこ

たりて。富めるも此まきふり。大和俗訓
七卷七丁ウ

安藝國佐伯郡五日市村小樋口直八といふ者あり。過し年。父をみまかりて。母と弟妹四人。おのまこと共ふ五人暮せしが。極て貧しき者ふれむ。その日乃畑もたてかねたる。田二反ばのま何づかきて。これを耕をいとまにを。とくら日傭をてくらしける。生質篤實にして。母につかへ孝を盡せる。とまこば平常農事いづるの

外。志をしと親の側をはなれず。まして一夜も他所に宿るといふ事をせむ。まこ雨天ふごよて。家ふ居る時。藁細工ふごいながら。よもやまの物語をし。母の心を慰め。妹弟を憐みて。中睦く。近隣との交りも厚かまけり。たまへ外



出する事何事と。諸人群集の所よを立ちよ
らび。とより喧嘩口論などにたづさひま
事さらふなけむ。母と心安きも此ふ思ひを
里。また預りほくる田地ながらも。租米皆濟せ
ぬやどい。一穂をもとたくしに用ひむ。九て奉
る年貢の品。何ふよらび精密よとくのへけり。
親と友の内よ。妻を迎ふづくすくむふが
あれどと。さるハ母の側よ給仕させんを。いと
よき事のやうなまこと。他人を交へたらんに

を母も心おかぬ事もあるづく。としさやう
のたどろろとよ。不平の事起る時ハ。此上もな
き不孝なりといひて。齡たけても妻を迎へど。
冬の夜とて。炭ふど買ひ蓄ふることならねハ。
巨燧よ火を入るといへども。久しく煖氣を保
ちえず。母のふと時を。うへ破れたる蒲團を
かけ。ふる綿入など取合せて着せ。夜もをりく
目を覺まして。火消ゆきを焚火をし。巨燧に以
まて。みづうらはいをだふ安く寐し事ふ。夏

の夜も度々起いで。草よりふびふびとづて。蚊遣
 りとし。母を―て安くいね―むるなど。その勞大
 かたならねど。さらに苦とせむ。また卧處は敷
 菌とてなけまば。麥藁を厚く―ま。おのれまづ
 寐試みて。母をふさしむるなど。此あつかひ。尋
 常の人乃かけても。たよびがごと事ごとおほ
 し。母をたよとひつり。いまだ老年といふにも
 至らむ。齡ハ五十をのりなまむとも。多病よて虚
 弱の質ふまば。あらまきはたらまひえせず。いも

うと弟などい。またまふ幼れぞ。こま我直ハ
 一人よて養ふ。その艱苦おもひやるべし。明治孝節録
 羽前國の平山村ふ。青木善七といふ者あり。父
 をも善七といひり。天保四年の飢饉よ。父善七
 村内の者よ。米錢を施し。危急を救ひし事。いと
 おやかまけり。其時今の善七ハ。いまだ十七歳
 よて。いとけなま者あるとしかど。性質物をあ
 れむ心ふかく。父の訓をよく守りて。月ごとに
 父よる渡―くる。小遣ひの錢を。猥よ費さば。

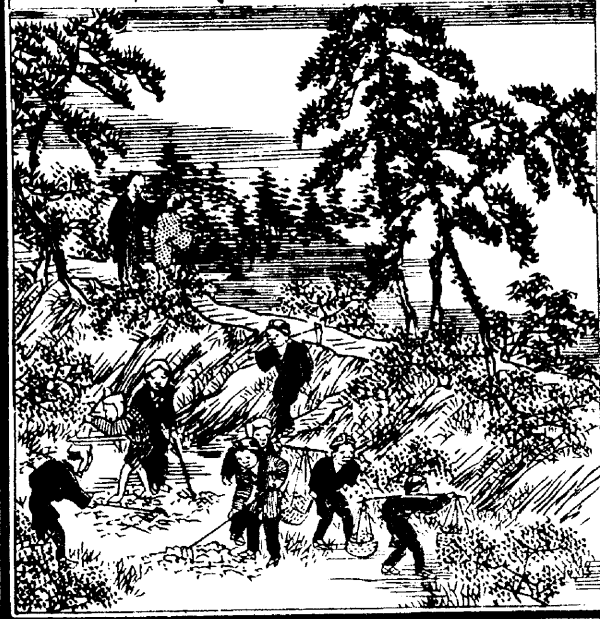
積貯へたきて。飢民を助けし事どもありて。幼
兒よいめづらきものなりと。其頃をてふ近
村ふ稱譽せる。其後父ふくれりて。母の老ての
これるが。病がちよくらをやすふ。朝夕の食事
成始め。起卧に至るまで。すべし常またがへ
事のみおわむと。善七母の詞をかくる。成
またぞ。意よされたちてと。扱ひし程よ。母い
たくよろこびて。母子の何ひだ殊よ睦トか
けり。さるまゝに舊藩の時よ。撰をきて村役

をつとめしが。引つゞき維新の後副戸長ふ補
せらる。ふまよ依て殊更に黽勵し。孝悌をそ
め農業をつとめしが。貧窮を恤み。孤獨を憐
一村の者を我子の如く思ひふし。其職よかな
もん事をのこいと勤めしかむ。村の者も
またよくなづきて。父母の如く仰ぎ慕ひ。互
むつまじく。公事訴訟などたふを者もなく。よ
く治まれるを。皆善七が精誠のつらぬける所
なり。善七常に村内の利益よならん事を勘へ

慶應二年に金八十兩をもて。村役所にあづけたる哉。潤農金となづけて。利息をやとく。貧窮の者よ貸與へ。農業を勧め課せしが。其よしもとの領主よ聞えて。褒賞せられけり。かくて其金とし哉ふるまふに。貳百兩にもみちなんとせしほど。貧民勸農の資本となすて。一村の潤ひおやかとならぶ。ふととど。また養蠶を人家第一の産業ふまば。村民を率ゐて。野川の傍に廢地を起し。桑を植しよ。年ごとに

桑田ひらけて。今日飢寒を免るゝ。ふ至りし。またく其功ふる。ことよとと。村人彌惣といふ者。租米の收納よくるし。し哉。金十七兩。外よとかりて。事をなくをさめよ。し。其後彌惣いとし。困窮ふふ。か。其十七兩をば。彌惣ふつのはして。金主へを己返濟よおよびけり。又村人卯右衛門といふ者の。居宅破損せし。かど。取繕ふ事もえせざる。哉憫む。金三兩めぐみて。雨露を凌がせたり。また村人與左衛門とい

ふ者の。收租えせぬを愍み。米貳石五斗を納め
 居かそし。後々のたづきをも。懇に扱ひつかそ
 一けり。さるふ善七。
 ととよる有餘ある
 富人ならねば。施せ
 る所いとおやしと
 いふにえあらねど。
 安政六年より。明治
 五年まで。十四年此



間ふ。鰥寡孤獨を救つる事。上件は舉し彌惣。卯
 右衛門。與左衛門の三人を除くの外。米貳十五
 俵。錢七百貫文。及べり。殊に潤農金と。桑田と
 の兩條。今に至りて。村民の潤色とされるふま
 ば。皆父母を慕ふが如く。仰ぎふづきて。おのづこ
 ら。村内の風俗も立をなすけさば。心ある者ど
 も。かこらひて。欣慕のあまり。かまごう功績を記
 し。石碑を建けるとなん。明治孝節録

第四章

禁非

○小兒をいまして。もろくの蠱魚など。およそ人の害よふらざる。いま物をみろとしむづのらび。又生類をくるしましむをからざ。犬猫鶏鴨など。ふやますづのららず。家道訓三卷 五丁ウ

○人の性。人よそしらるゝ事。成欲せず。笑はるゝ事。成欲せじ。君子ハ樂こて後笑チといひて。人の失事。越度を。何ざけり。目らふをからび。彼外よ。里洩聞かむ。いこのばかり。遺恨よ。思ふをし。されをわのき。又辱を得て。其害親に及ぶ。おとあらん。日新館童子訓 上卷三十三丁オウ

○言をつし。しみて。一言を出さふ也。

よく思按して以つて。言語のおの
ほからすくなし。むりふ口をとちて。
いまざるふいあらず。

大和俗訓
五卷三丁ウ

○天下にあらゆる事ども窮りふし
といつどもすべし。是非のふたつに。
過をからび。道理ふした。がふを是と
し。道理よ背くを非とを。されを非が

六と成。非爲と云なり。六論衍義大意
三十二丁オ

○人の隠を事を聞出し。或を窺みふ
をからむ。さして懇意よもふまき者と。
廣くなれ近づくをからび。いのかご
懇意のもれとて。詞を崩し交るべ
からず。さを奴僕の交りよ。ひとと
事ふて。耻づき事なる。

日新館童子訓
下卷二十八丁ウ

○愚なるもれを。人の善をいそむ。して。人の非を云事を好む。甚しき。已をてらそんため。人の非をあぐる。恥づきことにあらばや。同上上卷 三十三丁ウ

○人をそしめ。己が同類をうとんじにくみて。そこふふなり。是不仁。ふして愛ふまなる。同類をあふどり。か

ろんどて。ないのし。ろよそふ。不敬なる。無禮なり。不仁無禮の悪なる。尤いましむ。登し。初學訓二卷 十九丁オウ

○凡て平日おそまを謹む。事のおやま。ちなま。やうふまを。べし。萬の災過も。つ。ほし。み薄きよ。起るなり。言ふ信あ。まて。いつもりなく。まことある。本

とすべし。身不行せず。口ふひふを。信
なきふり。人と約して。其事を變ざる
も。信ふきなり。日新館童子訓
上卷六丁ウ

○世ふ法を犯し。罪ふ陷る人もあり。
身をほろぶ。家を破る人もあり。其
時よ至りて。さこそ後悔をらめど。え
我となしたる事ふて。我と受たる禍

なれを。誰をかうらみ。誰をかどごめ
ん。六諭衍義大意
三十二丁ウ

○常ふ我身^カをかへりみる。先我^カ過を
志るべし。をでふ過を志るふを。速よ
あらたむべし。尚書よ過を改むるに。
吝ならむといへり。吝といを。むふ
り。あやまちを。をしまびして。早く改

むる哉云。孔子も過てを。則改むるに。
をいかる事なかきとのたまへり。わ
が身の過をしらざる。愚ふる。過を
しめて改めざる。即惡なり。あらば
して過つよ。猶也のほこれもし。

大和俗訓六卷
四丁ウ

○人吉をば好めごと。ほくまげ。凶

をば惡め共怠る。人仁なる時を。心常
ふ樂し。不仁ふる時を。心常に憂ふ。樂
きをば好め共。仁をなさば。憂をば惡
め共。不仁をなま。これよしとを志す
ながら。當坐太義なるま。此一寸道
れふり。

民家童蒙解
下卷十九丁ウ

江都小石川の人某。狂暴比ひふし。朋友交りを

たつ。父亦以て子と爲さむ。隣又一老儒あり。恒
 其不孝哉のくゝる。某一日老儒の家よりいた
 り。禮を厚ふして。問て曰く。惡人も一旦善まか
 へらむ。則宿惡ことおとく消滅せんや。老儒以
 てく。善哉問ふこと。一日。創艾して過を改むれ
 ば。斯も善人たり。善人も一旦狂惑せむ。斯も惡
 人たり。某曰く。僕蠢愚にして親不順ならむ。朋
 友は悦むれむ。願くは教へを受け。行ひを改めん
 如何して可ならんや。老儒曰く。孝は百行の本

なる。記よ曰く。朝ふ省ミ夕に定むと。請ふ此よ
 り始めよ。某拜謝して還る。乃親は事ふること。
 一ふ其教への如く
 す。父以て狂と爲し。
 怒りかつ泣き。肯て
 飲食せむ。婦人謂て
 曰く。妾昨日。渠は儒
 家よりゆくと賭。必そ
 かに往て去るを問



つると。乃詳ふ其故を語る。父聞て悦び。即飲食を爲せり。是よる父子相親。遂は孝子とふる。

近世叢語

ある人。夏ごろよき瓜を得たりとせば。人にれくらんとて。十顆ばかりと厨子に入て。此瓜とづのらびといひて出よけり。然る處は阿字丸と云。七八歳の男子。むそか小厨子をひくきて。瓜一顆を取てくらひけり。夕方よ及で。其親のへりきて。厨子を開き見るふ。一顆うせにけ

り。これを誰う取たるぞと尋るふ。家内の者共。我も取らんとあらそひたり。正しく此家の人乃あざなり。外の人れ來て取るづきよあらびと。としたかく責問ふとき。ある女。書見の阿字丸こそ。御厨子と開きて。瓜一取出して。食ひはまといふ。父是を聞きてともかくといへば。其町ふ住けふおとなき人を。あまよびあつめけり。家内の者ども。こは何故よよび給ふよやと思ふ程。郷の人ども呼集めて。父瓜を

取たる兒を。ながく勘當して。此人々の判を取
 なり。判をとるとの共。以のなる事ぞと問へ。思
 ふ所侍るといひて。
 判を取けり。家内の
 者どと。是計の瓜一
 顆。子成ふけうを
 ることや有べき。物
 狂わしき事かふと
 いども。聞入をして



やこよけり。其後年月を経て。ふけうせられた
 る兒。盛長し元服して。志かるべき所は宮づの
 一ける程。盗みしてけり。捕きて問る所は。
 志あぐの者。此子なるといひ。これを。檢非違使。
 別當。その由をまうを。別當廳の下部ども。成
 具し。此冠者をさきよたて。父の家は行き。此
 由をいひて。追捕せんと。父が曰く。是は我子
 よあら。ふけうして。數十年は成ぬとまう。此
 廳の下部ども。用ゐを。して。怒罵りけま。父を

こたち此事を虚言と思ふ。其證を見まづし
 とて。證人の判を取たる文を取出して。下部ど
 えよみせ。彼判したる人共を呼て。此旨をいへ
 を判したる人ども。正しく先年かゝる事あり
 きといふ。下部一人歸て。檢非違使をもて。此由
 をまうせば。別當げよも父を悉るまじといひ
 て。下部ごと呼びかへし。冠者を獄に禁せられ
 父をさらは事ふくてやみにたり。此時よ及ぶ
 前よハ父が不慈なるやういひし者も。げふ

かゝこかまける人うなど。やめよけまといふ。
今昔物語
 和朝ノ部

小學修身初歩卷之三終

明治十九年五月六日版權免許
同 二十年三月 出版

編者

愛媛縣士族

藤澤南岳

大阪東區淡路町壹丁目
拾六番地

岐阜縣平民

山岸彌平

大阪東區北濱戴町目
五拾五番地寄留



出版人

發兌

賣捌

東京大阪
岐阜
大阪
同

東崖堂

山本支店
田中萬助

